

第1問 次の各問いに答えよ。

問一 次の①～③のことわざの空欄に入る適切な漢字を一字書け。(楷書ではつきり大きく書くこと。) また、意味として最も適当なものをそれぞれ選び、符号で答えよ。

① 胸 を開く

② の目にも涙

③ 立て板に

- ア いつもは非常に健康な人が病気になること。
イ 隠すことなく心中をうちあけること。
ウ 世間の噂うわさは防ぎようがないこと。
エ 弁舌がすらすらとしてよどみのないこと。
オ 無慈悲な人にも、時には慈悲の心が生まれること。
カ 心の底まで打ち明けて親しく交わること。

問二 次の①～③の四字熟語に最も近い意味のものをそれぞれ選び、符号で答えよ。また、選んだ符号の空欄に入る適切な語を漢字一字で書け。(楷書ではっきり大きく書くこと。)

- ① 一刻千金
- ② 主客転倒
- ③ 盛者必衰

ア が流れて木の葉が沈む

イ 目から へ抜ける

ウ 蛙かえるの に水

エ 濡れぬ で粟あわをつかむ

オ 驕おごる 家は久しからず

カ 光陰 の如ごとし

問三 次の語句の対義語をそれぞれ選べ。

- ① 遵守 ② 依存 ③ 黙秘
- ア 反抗 イ 供述 ウ 多弁 エ 違反 オ 自生 カ 自立

問四 次の作品の作者名を漢字で書け。(楷書ではっきり大きく書くこと。)

ア 五重塔 イ 城の崎にて ウ 檸檬レモン

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、字数制限のあるものは、句読点・符号も一字に数える。

ここまで生物の時間と呼んできたものが、どんな性質なのかを、もう少しはつきりさせておきましょう。心臓がドキンドキンと繰り返している、その一回分の時間や、^aハイが呼吸を繰り返す、その一回の時間、つまり、体の中で繰り返し起こっている現象の一回分の時間が、ここまで時間と言ってきたものです。繰り返しだから、クルッと回って元に戻る、その一回転の時間、つまり周期ですね。周期を時間ととらえています。

寿命は私たちにとっては、一回きりで繰り返しはききませんが、親が生まれて死んで、子が生まれて死んで、孫が生まれて死んで、という世代交代の繰り返し単位の単位が寿命だと見ることができません。その大きな一回転の、このあたりで生まれ出て、成熟し、老いて、と時間が配置されていると考えれば、これらの時間も、やはり回る時間ととらえてもいいでしょう。回る時間が生物の時間です。一方、古典物理学の時間は、まっすぐに流れ去っていく「直線的時間」です。

じつはこの二つが古来、時間の代表的なとらえ方なのです。

私たち日本人は回る時間の中で生きてきたようです。六〇歳で還暦。暦（つまり時間）が回って還^{かえ}ってくるのだから、これは時間が回るという考え方です。仏教では（注1）輪廻^{りんね}転生と言いますね。生まれ変わるたびに時間がゼロにリセットし、くるくる回っています。

直線的な時間をもつ人びとの代表はキリスト教徒です。キリスト教においては、神がこの世をお創りになった時から世の終末まで、神の時間が一直線に流れて行きます。神の時間は絶対的なものです。

これがニュートンを通して物理学に入ってきました。ニュートン力学が成り立つためには、必ずしもこのような時間の概念は必要なかったのですが、敬虔^{けいけん}なクリスチャンであるニュートンとしては、時間は当然、神の時間であり、絶対的で一方に真^まっ直^すぐ流れると考えたのです。だから絶対時間とは一種の信仰の産物です。古典物理学は、世俗化したキリスト教とも言える一面をもっているのです。

じつは時間生物学の教科書の中には、ここでお話しした話題は取り上げられていませんでした。（注2）サイズの生物学の文献中に出てきたのです。これは理解できることですね。^①西洋人は回る時間をサイクルと呼び、タイムと呼ぶことに抵抗を感じるようなのです。サイクルは時間（＝タイム）に入れてもらえないんですね。

古典物理学の時間は、エネルギー消費量によって変わるようなものではありません。でも、生物の回る時間は変わります。どうしてでしょう？ この問題に答えるには、そもそも生物とはどのようなものかを考える必要があります。

私は、生物とはずーっと続くようにできているものだと考えています。地球の歴史は四六億年。生物の歴史は三八億年と言われています。

続くようにできているからこそ、三八億年もの長い間、生物はこうして続いてこられたのです。

私たちをはじめ、生物というものは、こんな**b**「フクザツな体をもっています。そういう体をもったものがずっと続いていく。どうやったら、ずっと続く体を作ることができるでしょうか？」

体は構造物だから、建物を例にとつて考えると分かりやすくなるでしょう。ずっと続く建物をどうやったら作れるのか。単純に考えれば、絶対壊れないように作ればいいことになりませんが、それは不可能だというのが熱力学の第二法則です。秩序だったものは、時間が経てば無秩序になっていく。すなわち（注3）エントロピーは増大する。形ある物は、いつかは壊れるのです。絶対壊れない建物をたてることはできません。

じゃあ、壊れたら直し直しいけば、ずっと続くだろう、という考えは、当然出てきます。こうやって法隆寺などは続いていきます。でも古いものは世界遺産や国宝というような形で、ハレ物にさわるように扱っているのが現状でしょう。それに対して、生物の体は、跳んだりはねたりと、いつも現役で激しく働く必要があるのですから、直し直しというやり方も、なかなか **A** の乏しいやり方です。

とすると、ずっと続く建物を作るのは無理かというところ、やり方があるのですね。伊勢神宮です。形あるものは壊れるに決まっている。だったら壊れる前に、定期的にまったく同じものを建て替えていけばいい。伊勢神宮は二〇年ごとに（注4）式年遷宮を行って、そっくりのものに建て替える。こうして一三〇〇年たった今も、木の香も新しく、現役で機能しています。これはずっと続いていく建物を作る、じつに優れたやり方です。

② 生物は伊勢神宮方式を採用しているのですね。体は使っていればすり切れてきます。アンチエイジングなんて言って、いくら手をかけても、いったんガタがきたものは、元通りにはなりません。ガタが来たら、そんなものはさっさと捨てて、新しく、そっくりのものを作ってしまえばいい。それが子供を作ることです。自分そっくりの子を作り、自身は土に還っていきます。新たに作り替えるのですから、時間はそこでゼロに戻ったとみなせるでしょう。ここでは時間が回っています。作り替える作業を繰り返し、時間を回し続けていけば、永続できます。

だから子供は私なのです。この私は使っていると磨り減ってくるから、次の新しい私を作る。その次の私として孫をつくる。こうして私、私、私と渡していくのが私であり、そうやって私はずっと生き続けるのです。

体であれ建物であれ、作り替えるには多大なエネルギーがいります。作り替える、つまり時間を一回転させるごとにエネルギーがいるのですから、回転速度とエネルギー消費量は比例する。時間の速度がエネルギー消費量に比例するわけです。

これは子供をつくるという、世代交代に限られた話ではありません。たとえば筋肉が収縮する場合もそうです。筋肉の細胞の中には、ミ

オシンという太い繊維と、アクチンという細い繊維がぎっしり^d つまっています。ミオシンの繊維から手が出ており、これがアクチンの繊維を捕まえて、カクツと手首を曲げます。するとその分、ちよつとアクチンの繊維が動いて、わずかに収縮が起こります。次に、曲がった手首のところに(注5) ATPの分子がくつついて、エネルギーを供給します。すると手首はアクチンを手放して、また、曲がる前のまっすぐな状態になります。そうになると、再度、ミオシンの手は、アクチンを捕まえて、カクツと手首を振ることが出来る。こうして、つぎつぎに手首を振りながら、筋肉は縮んでいきます。

手首がカクツと曲がつて働いたということは「壊れた」とも言えます。そこにATPのエネルギーを注入して修理し、元の形にもどす。そうして新たに働けるようにしている。これで時間が一回転して元に戻ります。

時間を一回転させるのに一定量のエネルギーを使っています。早く何度も回れば、収縮速度が上がリ、それに比例してより多くのエネルギーを使うことになります。つまり筋肉においても、時間の速度とエネルギー消費量とが比例しています。筋肉は、体のエネルギー消費量のかかなりの部分を占めているものです。^③そこにおいてもこうなのですから、動物全体のエネルギー消費量と時間の速度が比例するのは、もつともなことでしょう。

私たちの体内には回るものがたくさんあります。血液の循環はその代表でしょう。細胞内での物質やエネルギーの代謝経路でも、多くのものが回転しています。光合成の中心に存在するのがカルビン回路ですし、われわれの体内で食物からエネルギーを生み出す中心となっているのがクエン酸回路です。この二つの回路がなければ生物のエネルギー生産は成り立ちません。

結局、続くものをデザインしようとするれば、回せばよいのです。生命は回るデザインをもつことにより、ずっと続くことを可能にしているのですね。

月は満ちていき、そして欠け、^eツきてしまします。でもまたよみがえってきて満ちていく。これを繰り返します。ニコライ・ネフスキー(ロシアの東洋言語学者)に「月と不死」という論考がありますが、それによると、古代の日本人は、月に不死を見ていました。不死とは死ぬことがないことじゃないんですね。^IIが不死なんだ、というのです。これは、じつに正しい生命観だと思えます。

生物的時間は回ります。生物の時間は円くデザインされているのです。もちろんエントロピーは増大しつづけますから、その意味では、時間は直線的に流れていって元には戻らないのですが、生きものは、エネルギーを注入することによりエントロピーの増大を抑え、元の秩序だつた体に戻しています。^④ここが物理的時間と生物的時間の、大きく違うところです。生物はエネルギーを注ぎこむことにより時間を戻しているのです。

ただし元に戻るからと言って、時間に **B** がないわけではありません。子供は大人になりますが、大人が子供に戻ることは起こらな

語

国

いのです。生物の時間の回転は一定方向で、逆回りはしません。この回転方向を決めているのがエントロピーです。生物は一定方向に回りながら元に戻るのを繰り返しています。

個体の一生の時間は、一方向に流れて行き、元には戻りません。でも、世代交代という視点で見れば、時間はクルクル回って元に戻ります。生物の時間には **C** があるのですね。

古代のギリシャ人は、このことを認識しており、生物に対して、ピオスとゾーエーという、二種類の言葉を使っていました。

本川 達雄 著 「生物学的文明論」新潮社、二〇一一年、一七三ページ～一八一ページ

(注1) 輪廻転生——仏教で、一切の生物が、車輪が回転するように生きかわり死にかわりし続け、迷いの世界を転々とする事。

(注2) サイズの生物学——動物はサイズによって機敏さや寿命が異なり、総じて時間の流れる速さが異なるなど、サイズからの発想によって動物のデザインを考察しようという生物学。

(注3) エントロピー——熱量と温度に関する物質系の状態を表す熱力学的量の一つ。一般的には「エントロピーが増大する」とは、「物事は秩序から無秩序の方向へ進む」といった意味を表す。

(注4) 式年遷宮——一定の年数を経過するごとに神殿を造営し、神体を移すこと。伊勢神宮では、奈良時代以降二十年目に行われている。

(注5) ATP——アデノシン三リン酸。生体内のエネルギーの貯蔵・供給・運搬を仲介している物質。

問一 二重傍線部 a～e について、カタカナを漢字に改めよ。(楷書ではつきり大きく書くこと。)

問二 空欄 **A** **C** に入る表現として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

ア 二面性 イ 可逆性 ウ 可塑性 エ 具体性 オ 実現性 カ 固有性 キ 方向性

問三

傍線部①「西洋人は回る時間をサイクルと呼び、タイムと呼ぶことに抵抗を感じる」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

ア 西洋人にとって「時間」とは、キリスト教の信仰にかかわる絶対的なものとして一方向に真つ直ぐ流れるものであり、「回る時間」を「時間」と区別して認識しているため。

イ 世俗化したキリスト教という一面を持つ古典物理学における時間の考え方が、近代科学である時間生物学による時間の考え方によって更新されるまで、多くの時間を費やしたため。

ウ 敬虔なキリスト教徒であったニュートンが、ニュートン力学において絶対的で一直線に流れる「神の時間」を「タイム」として定義し、「サイクル」と区別したため。

エ キリスト教においては、神がこの世を創ったときから世の終末まで一直線に流れる時間の中を人びとが生きていると考えられており、「サイクル」という考えは概念上存在するものではないため。

オ 物理学ではニュートンが一直線に流れる時間の概念を「タイム」と呼んだのに対し、生物学では生物の世代交代の繰り返しの単位を「サイクル」と呼び、それぞれに定義されたため。

問四

傍線部②「生物は伊勢神宮方式を採用している」とは、どういうことか。五十五字以内で説明せよ。

問五

傍線部③「そこにおいてもこう」とあるが、どういうことか。本文中の表現を使って、六十字以内で説明せよ。

問六

空欄 I に入る表現として、最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

ア 死ぬことで、直線的な時間から回転する時間を生きたりするようにすること

イ 死ぬことによって、ほかの人生を生き始めること

ウ 月でさえも消滅する瞬間があるのだから、座して死を受け入れること

エ 死ぬことで、生まれた時点まで時間を戻すことができること

オ 死んでよみがえり、死んでよみがえりを繰り返していくこと

問七 傍線部④「ここが物理的時間と生物的時間の、大きく違うところですよ」とあるが、「大きく違うところ」とはどのようなことか。七十五字以内で説明せよ。

問八 本文の内容と合致するものを、次のうちから二つを選び、符号で答えよ。

- ア 「生物の時間」とは、生物が繰り返す現象の周期を時間ととらえたものであり、人類に普遍的な時間のとらえ方である。
- イ 壊れたところを直し続けて現存している法隆寺のように、壊れた箇所を直し続けられれば、生物も永続することができる。
- ウ 私たちの体は、血液の巡りや食物からエネルギーを生み出すクエン酸回路など、回転する構造によって維持されている。
- エ 生物が体を作り替え時間を一回転させるには多大なエネルギーを要するが、それは世代交代のみ見られる現象である。
- オ 時間がどのように進むのかを考察するには宗教的な側面に触れざるを得ないので、議論が避けられてきた経緯がある。
- カ 古代ギリシャ人が生物を表す言葉を二種類使っていたのは、生物に二種類の時間があることを認識していたためである。

第3問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。ただし、字数制限のあるものは、句読点、符号も一字に数える。

フリードリヒ・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) はマルクスと同じように、正義という概念、「正しさ」という概念に背後に「潜む」(注1) イデオロギー的な装いの匂いを嗅ぎつける。そして「正しさ」の概念の系譜学的な考察を始めるのだ。「正しい」とは、そもそも最初はどのようなものだったろうか。この問題をニーチェは二つの道筋で考える。第一の道筋では、国家における正義の(注2) 弁証法というまっとうな観点から正義を考察するものである。しかしこの道筋には言わば「裏道」として、キリスト教の(注3) ルサンチマンによる道が「ヒカえて」いるのである。

そもそも正義という概念が可能となるためには、ニーチェは「約束する人間」が誕生する必要があったと考える。これは約束し、責任をはたし、良心をもち、正義を貴ぶ人間であるが、この人間は多くの苦勞のすえに生まれたのである。

① ニーチェはこの新しい人間が登場した背景にあったのは、契約関係だと考える。特に借金をするための契約では、負債を返済することが確約しなければ金を借りることはできない。その約束が「厳粛で神聖なものであることを相手に保証するために、そして返済することが義務であり、責務であることを自分の良心に刻み込んでおくために、さらに万一反済しなかった場合のために、契約に基づいて債権者に抵当を差しだす」。抵当となるのは、自分の身体、妻、自由、生命のような、借り手にとって貴重なものである。

債務者が返済できなかった場合には、その貴重なものは奪われるか、債務者の身体に残酷な責め苦が加えられる。「負い目」「良心」「義務」「義務の神聖さ」などの A な概念は、この債務の法律の世界から生まれてきたのだと、ニーチェは指摘する。そして「この道徳的な概念の世界からは基本的に、血と責め苦の臭気が完全にヌグイ去られたことはなかった」とつけ加える。

しかしこの血と責め苦の結果として、「約束を守る人間」が誕生したとニーチェは考える。この人間の暗い「前史」を背景として、もはや身体を抵当にいれなくても、きちんと約束を守り、責任をはたし、正義を遂行する人間が登場するのである。「約束することのできる動物を育成すること、これこそが、自然が人間についてみずからに課した逆説的な課題そのものではないか」。

この「多くの過酷さと防圧と痴愚が含まれている」育成のプロセスによって、初めて「至高な個人」が、B な人間が誕生する。この「自由になり、真実の意味で約束することができるようになった人間、自由な意志の支配者となった人間」は、みずからに強い誇りをもつようになる。

これは人間が人間として完成したということであり、ここに暴虐が自由をもたらすという逆説がある。「この人間のうちには、すべての筋肉が震えるほどの誇り高き意識がみられるだろう。これは、ついに彼のうちで実現され、自分のものとなったほんらいの意味での力の意

識と自由の意識であり、人間そのものが彼のうちで完成されたという意識である」。

この誇り高き人間たちは、約束を守り、責任を負う道徳的な主体として、国家を形成する。そしてこの国家は、共同体との約束を侵害した者を、最初は厳しく処罰する。共同体とその成員の関係は、債権者と債務者の関係と同じものだとニーチェは考える。共同体の成員は、共同体から保護される代わりに、共同体の法を守ることを約束したのである。

この約束を破った者にたいして、「怒り狂った共同体は、その者をこれまで保護してきた状態から、もとの野蛮で法の恩恵を奪われた状態へと追い返す」のである。これが共同体の示す正義である。この法の外に置かれた者、ホモ・サケルにはどのような危害を加えても、罪を問われることはないのである。

しかしやがて共同体は、契約にたいする違反への処罰も強すぎると、逆の効果が発生することに気づく。法が侵害されて被害が発生すると、その被害の修復を求める正義の声が強くなる。これが行き過ぎると、加害者にたいする報復が、最初の害よりも強まる可能性がある。「共同体は直接に被害をうけた人々の怒りから」、加害者を保護するようになるのである。

そして共同体は、この事件の範囲を限定し、「多くの人々が関与してきて、不穏になることを防ぐ」ようになる。やがては「すべての違反がある意味で賠償しうるものとみなす」のである。共同体はそのために人間の身体のすべての部位に価格をつけて、被害を修復するための正当な価格を設定するようになったのである。

正義の法とは、「すべてのものには価格がある。どんなものでも金を払えば手にいれることができる」という一般命題に依拠するものである。「これをもっとも素朴な正義の道徳的な基準」であった。被害者の復讐の念をおさえ、復讐に復讐をする連鎖をおしとどめ、「ほぼ同等な者たちのあいだで、たがいに和解し、たがいに埋め合わせることで〈了解〉しあおうとする善意であった。そして力の弱い者たちを強制し、たがいに埋め合わせをさせようとするのである」。

ハンムラビ法典から旧約聖書にいたるまで、「目には目を、歯には歯を」という同害復報^①の法が定められているが、これは被害者に無法な復讐を認めるのではなく、同等物の返済で解決しようとするものであった。この^②矯正的な正義が、国家による法の施行の重要な目印だったのである。だからこそ「古代からいたるところで、人間の四肢と身体のさまざまな部分について、合法的な価格査定が、きわめて精密で、ときには恐ろしいほどの細部にいたる価格査定が行われてきたのである」。

被害の対価をきちんと定めることで、過剰な害が加害者に加えられるのを防ぐのである。^③法と正義は、以前とは反対の意味で、被害者の保護と調停の目的で利用されるようになったのである。

さらに社会が発達し、その富が大きくなると、わずかな成員による法の侵害にそれほど神経質に対処しなくても、平然としてそれを許す

ことができるようになる。矯正的な正義では、「X」[□]と定めていた。しかしやがては支払い能力のない者は放免して、ことを荒立てないことを選ぶようになる。

これが恩赦である。恩赦を実行することができるのは、国で最高の権力をもつ者である。これはもはや「法の彼方」であり、正義はここで「みずからを（注4）止揚して消滅するのだ。これが正義の自己止揚である」。ニーチェはこの正義の止揚が「恩赦」^{グナード}という言葉で呼ばれていることに注意を促す。グナードとは神が与える恩恵であり、恩寵^{わんちよう}を意味するのだ。権力者は許すことで、ついに神にひとしい地位に昇るのである。

この神とはキリスト教の神であることをニーチェは暗黙のうちに語っている。正義が自己止揚するにいたるまでには、一本の裏道があるからである。正義の弁証法は、共同体とその成員の間のある種の契約がどのように維持されるかということ、その違反者への対処と処罰の道筋として語ってきた。身体への処罰が「C」[□]に行われるということのうちに、供犠と祝祭の要素が含まれることを除くと、ここには宗教的なものはほとんど含まれていない。そして供犠と祝祭は、残酷さを含むものであることは、「人間のもつとも古い、もつとも長い歴史がそれを教えてくれる」のである。これはすべての人間に共通したもののなのだ。

しかし西洋の伝統に含まれるキリスト教の歴史は、この弁証法に別の「味わい」を加えたのである。それは国家のうちで支配された人々の間に、能動的な人々とは異なる受動的な人々が形成され、これらの人々のうちに、ユダヤ教とキリスト教の教えが「シントウ」^{シントウ}したからである。

優越的な人々はみずからを「良い」と判断し、自立して行動し、その行動のうちに幸福を味わっていた。「良い」ということは、「最高度に価値の高いもの」を意味していたのである。しかし支配される人々、「抑圧された者、踏みつけにされた者、暴力を加えられた者」のうち、こうした優越的な人々にたいする「エンコン」^dの念、ルサンチマンが生まれたとニーチェは考える。

暴力は悪である。抑圧は悪である。踏みつけにすることは悪であると、この受動的な人々は考える。だから優越する人々は悪しき者たちである。悪しき者たちに暴力を加えられるのは、善き人々である。だからわれわれこそが、善き者であると、このルサンチマンは論理を進める。こうして善とは、価値の高さではなく、行動の欠如、「何もしない」こと、暴力を加えないこと、誰も傷つけないこと、他人を攻撃しないこと、報復せず、復讐は神に委ねることと定義されるようになった。価値の逆転である。

この価値の逆転にともなって、新たな正義の概念が生まれることになった。正義はもはや共同体と契約との関係においてではなく、善と悪との関係において考えられるようになる。優越した者がなすことは悪であり、不正である。善き人々がなすことは善であり、公正であると考えられるようになったからである。

これは共同体の約束に違反する者に処罰を加える現世の権力者が不正であると考え、^④正義の概念をまったく逆転させることになった。神の正義はⁱⁱⁱ彼岸で神の裁きとして示されるものであり、現世の正義とはまったく異質なものとなったのである。「へみずから復讐することができない」は「へみずから復讐することを望まない」と言い換えられ、ときには「赦し^⑤」と呼ばれることもある」ようになったのである。

この逆転した論理によると、被害をうけた者が、加害者を赦すことで、恩赦を与える神のごとき地位に立つことになる。そしてみずから復讐するのではなく、別の何らかの形で加害者に罰が加えられると、「彼らはそれを報復と呼ばずに「正義の勝利」と呼ぶ」のである。これは「復讐を正義という美名で聖なるもの」と「することである。「正義とは根本では、傷つけられた者の感情を發展させたものにすぎないかのよう」である。

このルサンチマンの感情を育み、価値の転換を推進したのが、ユダヤ教とキリスト教の司牧者たちである。司牧者は信者たちの心に「疾しき良心」を植えつけることで、苦難に耐えることを教えた。信徒たちに、「自分が有罪であり、罪を償うことができないほどに呪われた存在である」と思い込ませたのである。

これは行為において野獣であることが禁じられたために、「観念の野獣性」を爆発させることである。そしてキリスト教は、この根源的な有罪性を償うために、十字架で処刑されたイエスを利用したとニーチェは考える。「神が人間の負い目のためにみずから犠牲にした」と教えたのである。「債権者がみずから債務者のために犠牲にする」、しかもそれを愛によってだといっているのである。

神が人間の罪を償うというキリスト教のこの神話は、債権者と債務者の関係から生まれた正義の弁証法を、いわば「タクミナ形で盗用し、それを乗っ取っているのである。そのために良心にもほんらいの卓越者の良心と、ルサンチマンの「疾しき良心」の二つの良心が生まれるようになったのであり、それに対応する形で、正義の概念が二重の意味をもつようになったとニーチェは考えるのである。

中山 元 著 「正義論の名著」筑摩書房、二〇一一年、一八九ページ〜一九八ページ

(注1) イデオロギー——哲学・宗教・芸術など、人間の根本的な考え方の体系。とくに政治的・社会的なものの考え方。
 (注2) 弁証法——ある物事が自己自身の中に対立・矛盾を生み出し、それが解決されることで高次のものへ発展する思考法のこと。
 (注3) ルサンチマン——ニーチェの用語で、弱者や被支配者の、強者や支配者に対する憎悪やねたみのこと。またこれを解消しようとする気持ちを鬱積させていること。筆者はここで、正義という概念がルサンチマンの発生によって当初には思いもよらなかった方向に発展してゆくことを予告している。
 (注4) 止揚——あるものを、対立・矛盾する要素と発展的に統一して、より高い段階で生かすこと。

問一 二重傍線部 i ~ iii の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 二重傍線部 a ~ e のカタカナを漢字に改めよ。(楷書ではっきり大きく書くこと。)

問三 波線部 x の言葉の読みと、本文中での意味を簡潔に書け。

問四 空欄 A ~ C に入る表現として最も適当なものを、次のうちからそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

ア 暴力的 イ 圧倒的 ウ 根源的 エ 道徳的 オ 自律的

問五 傍線部①「ニーチェはこの新しい人間が登場した背景にあったのは、契約関係だと考える」とあるが、このように考えたのはなぜか。「新しい人間は……」に続けて、五十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部②「矯正的な正義が、国家による法の施行の重要な目的だったのである」とあるが、「矯正的な正義」とはどのようなことを目指して行われるのか。その内容を「……こと。」に続くように、三十五字で抜き出せ。

問七 傍線部③「法と正義は、以前とは反対の意味で、被害者の保護と調停の目的で利用されるようになった」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア 法と正義の目的が、加害者を処罰するものから、合法的に人間の身体に価格をつけるものに変化したということ。
- イ 法と正義の目的が、共同体の法を守らせるものから、正当な査定価格を設定するものに変化したということ。
- ウ 法と正義の目的が、被害の修復を厳しく追求するものから、復讐の連鎖を防ぐものに変化したということ。
- エ 法と正義の目的が、法の侵害を防ぐものから、善意によって和解することを強制するものに変化したということ。

問八 空欄 X に入る表現として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、符号で答えよ。

- ア すべてのものは賠償されうるし、すべてのものは賠償されねばならない
- イ 被害者の復讐の念をおさえ、復讐の連鎖を断たなければならない
- ウ すべてのものには価格があり、金を払えば手にいれることができる
- エ 被害者は、加害者に対し、受けた害以上の報復をしてはならない

問九 傍線部④「正義の概念をまったく逆転させることになった」とあるが、「逆転」したとはどういうことか。五十字以上七十字以内で説明せよ。

問十 本文の内容と合致するものを、次のア～エのうちから二つ選び、符号で答えよ。

- ア 共同体の成員は、共同体に保護を求める代わりに法を守るという契約を結んだと考えると、共同体と成員を債権者と債務者にたどることができる。
- イ 国家は、共同体の法を侵害した者を厳しく処罰するが、社会が高度に発達すると、恩赦を実行することによって復讐を防ぐようになる。
- ウ ハンムラビ法典と旧約聖書は、被害の修復のために加害者が被害者に同等物を返済すべきであると定めている点で同様であるといえる。
- エ 良心には、「卓越者の良心」と「疚しき良心」があるが、いずれもユダヤ教とキリスト教の司牧者によって人々に植えつけられたものである。